

ふ よ う
芙蓉部隊



「芙蓉部隊」とは、正式名称を「第131航空隊」と言い、連合艦隊所属の夜間戦闘機隊である戦闘901飛行隊、戦闘812飛行隊及び戦闘804飛行隊が、昭和20年1月に藤枝海軍航空基地（現航空自衛隊静浜基地）に集結し、再編された部隊の通称である。

太平洋戦争も終盤に近づくと、日本は国力を消耗し、熟練パイロットも非常に少なくなり、通常の作戦では米軍に歯が立たなくなってきたため、「特攻」が作戦の主流となっていた。しかしながら昭和20年2月下旬、「芙蓉部隊」の指揮官であった美濃部少佐は、沖縄周辺に襲来する米軍を迎え撃つための作戦会議において、未熟な者による「特攻」よりも夜間銃爆撃の方が有効と主張し、「芙蓉部隊」を特攻部隊の編成から除外することを上級司令部である第3航空艦隊司令部に承認させ、搭乗員及び整備員の養成、訓練、航空機の整備を極めて合理的かつ効果的に行った。



美濃部正少佐（撮影当時は大尉）

昭和20年3月末、沖縄攻防戦にあたり、「芙蓉部隊」は主力を鹿屋海軍航空基地（鹿児島）に移し、菊水1号作戦発動とともに沖縄在泊の敵艦船及び敵飛行場に対し夜間攻撃を開始した。

鹿屋海軍航空基地が頻繁に空襲にさらされるようになったため、昭和20年5月中旬、「芙蓉部隊」は鹿屋海軍航空基地北東約27kmに位置する、カムフラージュを完璧にした岩川海軍航空基地に展開し、攻撃を継続した。岩川海軍航空基地においては、夜になると完璧な灯火管制を実施することにより、終戦まで一度も米軍に発見されることなく夜間攻撃を続け、米軍に甚大な損害を与え続けた。

他の部隊が「特攻」により戦力が枯渇していく中、「芙蓉部隊」が犠牲を伴いながらも攻撃を継続できたのは、やっと離着陸ができるようになった経験の浅いパイロットでも、往復約1700km、約5時間にも及ぶ夜間攻撃が可能となるまで鍛え上げ、随時要員を交代させるという当時の日本軍としては例を見ないシステムを確立するとともに、他の部隊での可動率が約40%でしかなかった「彗星」の可動率を、85%に維持し、常時戦力を供給できる態勢を確立していたからである。

「芙蓉部隊」は、1機の特攻機も出すことなく終戦まで夜間攻撃をもって戦い続け、わずか半年ほどの歴史であったが、戦艦1隻、巡洋艦1隻、大型輸送船1隻の撃破、敵機夜戦撃墜2機という戦果を上げた。

攻撃開始からの出撃回数は81回、延べ出撃機数は786機、散華した隊員は105名であった。

参考

I 当時の藤枝海軍航空基地

II 攻撃作戦の活動範囲

III 優れたパイロット

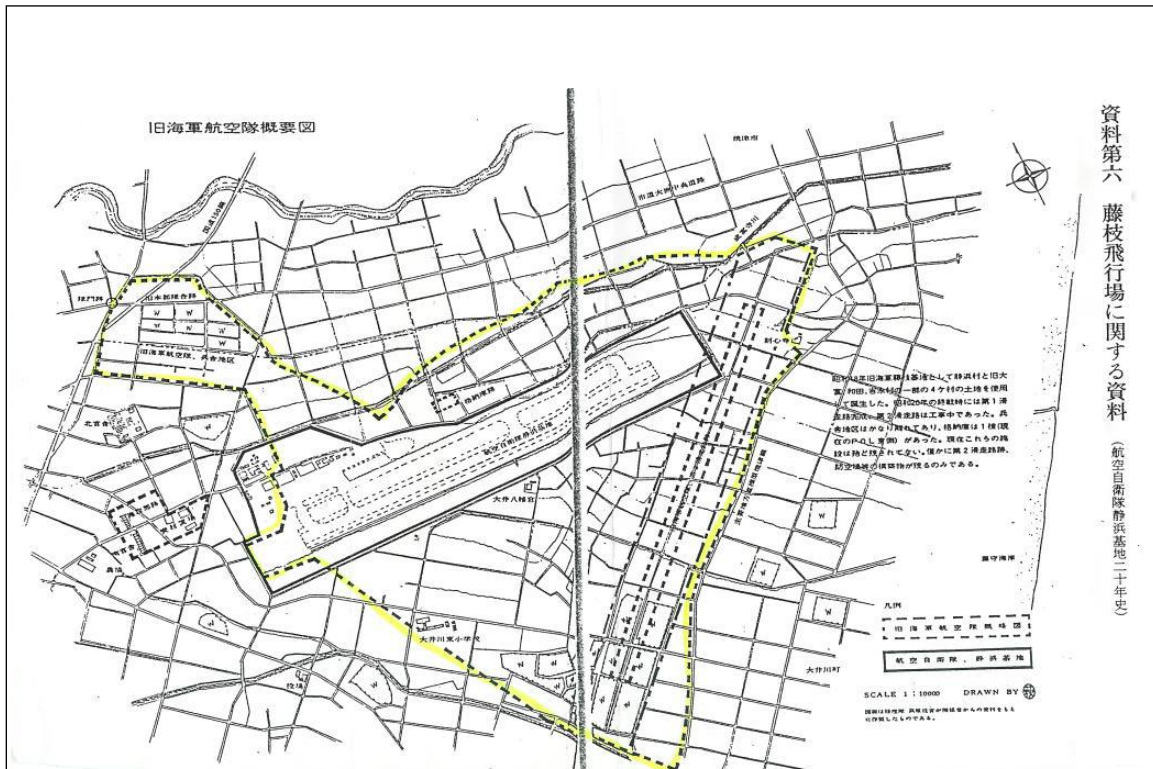
IV 愛機精神の強い整備員

V 使用した航空機

主要参考文献

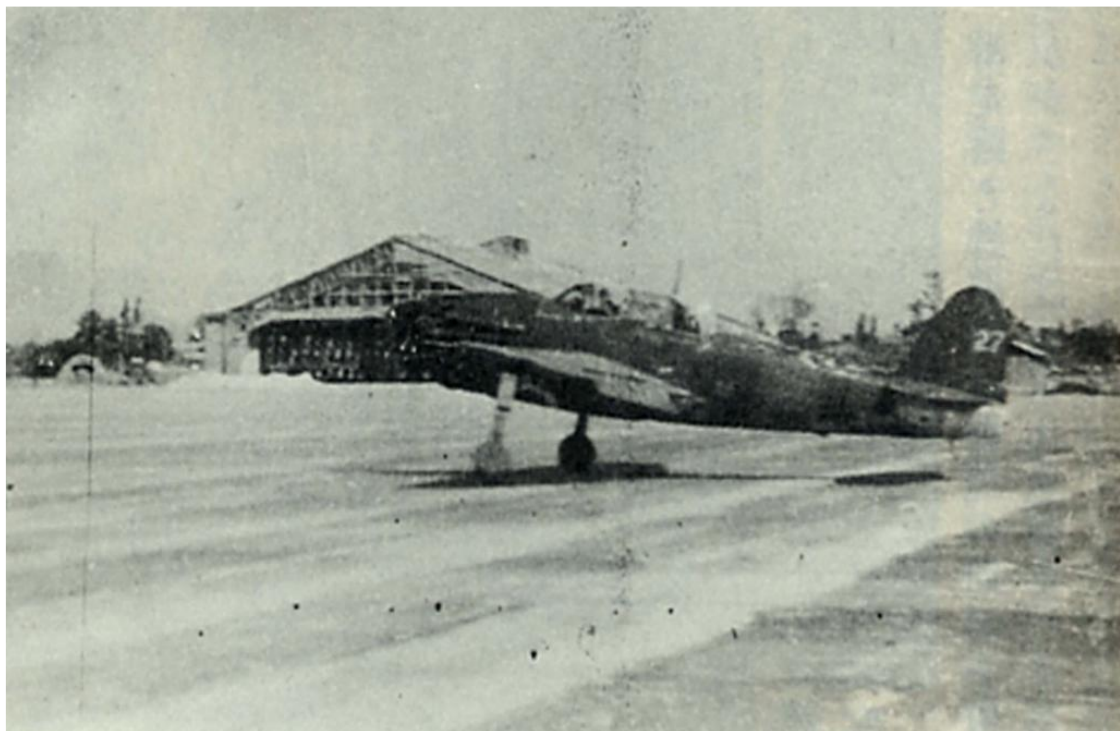
- ・「海軍夜間戦闘機芙蓉部隊戦闘記録」編著芙蓉会
- ・光人社NF文庫「彗星夜襲隊」渡辺

I 当時の藤枝海軍航空基地



資料第六 藤枝飛行場に関する資料 (航空自衛隊藤枝基地二十年史)

藤枝海軍航空基地全体図



藤枝海軍航空基地から訓練飛行に発進する「彗星」一二型
(前部固定風防を夜戦型に改修)

II 攻撃作戦の活動範囲



攻撃の一例では、午後11時から15分間隔で鹿屋海軍航空基地を出撃して敵を長時間制圧したり、敵をまくために、往復約1700kmかけて帰還したこともある。

Ⅲ 優れたパイロット



芙蓉部隊戦力の中核をなした下士官搭乗員たち

薄暮・夜間の操縦は難しく、昼間よりも多くの訓練を必要としたが、戦況の悪化により訓練に使用できる燃料は一人月間15時間分しかなかった。

しかし美濃部少佐は、優秀なパイロットを短時間で育てあげられるよう指導方法を創意工夫した。美濃部式夜間航法訓練は非常に厳しく、ベテランでも涙をこらえて訓練に励んだという。成果は顕著で、飛行時間数が少ない搭乗員でも短期間で夜間洋上進出を果たせる技術が身につけていった。その特徴は以下のとおり。

1 昼夜逆転生活

作戦の主体は夜間進攻のため、身体を夜にならすため「猫日課」と称して昼夜を逆転させた。午前零時に起床、1時に朝食、6時に昼食、11時に夕食、午後4時に夜食を出し、電灯使用を制限して夜目の強化をうながした。

2 夜間洋上航法訓練

黎明－薄暮－夜間の順で定点着陸訓練からはじめ、太平洋へ出たの洋上航法通信訓練を行った。また、全搭乗員に訓練を繰り返す十分な時間的ゆとりと燃料の割当がないため、指揮所の二階に基地の立体模型を作って夜間の進入経路を覚えさせ、図上演習を繰り返し実施した。更に、2～3機でも薄暮・夜間飛行訓練を行うときは可能な限り見学させ、「飛ばない飛行訓練」に努め、燃料不足をいたずらに嘆くことなく練度向上をはかった。

3 座学の重視

飛行作業の合間をぬい、講義が頻繁に行われた。特に雨天時は搭乗員を集めての集中的な講義が実施された。講義の内容は航法、通信、夜間の艦艇の見え方、攻撃方法などの戦術、飛行機の構造、機材等についてであった。

IV 愛機精神の強い整備員



海軍トップクラスの可動率を維持し続けた整備員達

「芙蓉部隊」では、昭和20年3月～同年8月15日まで整備員の努力により高可動率を維持し、敵地を攻撃し続けた。

高可動率は、航空機製造会社の技術員を藤枝海軍航空基地に呼んで指導を受けたことのほか、「芙蓉部隊」の3個飛行隊の整備員が共同作業を行い、更に、余暇を用いてエンジンの基本を徹底的に学ばせるとともに、毎日の整備訓練を継続させた等の努力によって維持された。

「芙蓉部隊」の終戦時の兵力は以下のとおりであり、終戦時これだけの実用機を保有し、連日のように沖縄のアメリカ軍に対し夜間攻撃を加えることの出来た航空部隊は、海軍航空隊の中でも「芙蓉部隊」をおいて他にはなかった。

岩川海軍航空基地：「彗星」×45機、「零戦」×25機

藤枝海軍航空基地：「彗星」×40機、「零戦及びその他」×30機

V 使用した航空機



速度・突破力に優れる「彗星」



運動性能、航続力及び火力に優れる「零戦」

| 機種 | 「彗星」 | 「零戦」 |
|------|---|--|
| 型 | 12型 | 52丙型 |
| 全幅 | 11.50m | 11.0m |
| 全長 | 10.22m | 9.121m |
| 全高 | 3.175m | 3.5m |
| 自重 | 2,633kg | 2,155kg |
| 総重量 | 3,825kg | 3,150kg |
| 発動機 | アツタ 3 2 型 (1,400馬力) | 栄 2 1 型 (1,130馬力) |
| 最高速度 | 579.7km/h (高度5,250m) | 559.3km/h (高度6,000m) |
| 上昇限度 | 10,700m | 11,050m |
| 航続距離 | 1,463km | 1,920km |
| 武装 | <ul style="list-style-type: none"> ・機首7.7mm固定機銃2挺 (携行弾数各400発) ・後上方7.7mm旋回機銃1挺 (97発弾倉×6) | <ul style="list-style-type: none"> ・翼内20mm機銃2挺 (携行弾数各125発) ・13mm機銃3挺 |
| 爆装 | <ul style="list-style-type: none"> ・胴体250kgまたは500kg爆弾1発 ・翼下30~60kg爆弾2発 (翼下に搭載用レール) | <ul style="list-style-type: none"> ・30kgロケット爆弾4発又は 60kg爆弾2発 |
| 乗員 | 2名 | 1名 |
| 製造会社 | 愛知航空機 | 三菱／中島航空機 |